

東洋銀行 1842－1884年

東北大学 鈴木俊夫

東洋銀行 Oriental Bank Corporation（1842年設立の西部インド銀行 Bank of Western India が1845年に行名変更した Oriental Bank をオリエンタル銀行、その後1851年に同行がセイロン銀行 Bank of Ceylon を買収して設立した特許銀行である Oriental Bank Corporation を東洋銀行と呼称する）は、19世紀中葉から破綻を遂げる1884年までの時期、半世紀弱という短期間ではあったがアジアにおける貿易金融や資本取引において盟主的な地位を占めた最有力の英系海外銀行であった。実際、東洋銀行の最盛期となる1870年初頭の時点を取れば、アジアに事業展開した主要な英系海外銀行4行（東洋銀行、香港上海銀行、チャータード銀行、チャータード・マーカンタイル銀行）を比較すれば、払込資本金、準備金、配当率のいずれにおいても東洋銀行が勝り、同行の有した圧倒的な金融力の一端を窺い知ることができる。

1851年にセイロン銀行を買収した東洋銀行は、「東洋において〔王室の特許状により設立された〕最初の法人銀行」として大いに発展を遂げるが、不幸にして1884年に支払停止に陥ったため、内部経営文書が破棄され保存されることがなかった。このため日本における営業活動を別にすれば、アジアとの取引に果たした同行の重要性に比して研究が著しく立ち遅れた英系海外銀行の一つとなっており、東洋銀行の創設から支払停止までの全期間を対象とした詳細な研究は存在しない。本報告では、英国国立文書館の大蔵省文書 Treasury Papers、ロンドン大学 SOAS 図書館のマクリーン書簡集 David McLean Papers、香港上海銀行グループ・アーカイヴズの香港上海銀行、チャータード・マーカンタイル銀行史料などの東洋銀行の監督先や取引先の原資料を利用して迂回的に接近し、さらには〔デジタル版〕『タイムズ』紙や『銀行家雑誌』 *Banker's Magazine* などの金融業界紙の報道記事を最大限に活用することで、東洋銀行の経営史全般に光を当てることにしたい。同行は先発の特許銀行として成功を収めるが、銀価格の全般的な下落の下でアジア現地の貸付や投機に大規模に資本を固定化させ（資本金150万ポンドを上回る200万ポンド）、外債発行業務に手を染めたことが経営破綻の直接の原因となった。報告内容は次のようであるが、パネルの時間的な制約から東洋銀行の創業と破綻の時期を中心に論じることとする。

- (1) 東インド会社の送金制度と国際銀行
- (2) 東洋銀行の創業と発展
- (3) 東洋銀行の衰勢
- (4) 東洋銀行の経営破綻の要因
 - i. 現地貸付
 - ii. 外債発行
 - iii. 銀価格の下落と銀行経営